サンケイスポーツ '87 9/28 7版 <6>

片男波親方急死

相撲道50年…玉の海ら名力士育て

64歳、心不全で

大相撲の元関脇・玉乃海で、"熊本部屋"の親方をとった日本相撲協会の副理事長・片男波部太郎（かたおなみ・たけたろう）親方（本名・三浦野平＝みうら・ともひろ）が二十七日午前九時十七分、心不全のため、入院先の東京都文京区・順天堂大付属病院で死去した。六十四歳。通夜は二十九日午後六時から、葬儀は三十日午前十一時から、いずれも東京都港区赤坂一ノ三ノ九の自宅（片男波部屋）で、二所ノ関一門葬として行われる。喪主は妻・雪子（はるこ）さん。親方衆議員長は、予定通り（現役中に急死）会長代行（初代親方死）。

「相撲道五十周年記念パーティー」で花束を受けた故片男波親方と雪子夫人。あまりに突然の訃報だった

同親方は昭和十二年夏場所初土俵。本格的戦争中、幕内としてガダルカナル島で九死に一生を得て帰国、九年半のブランクのあと十五年夏場所に幕下付け出しで復帰、二十七年秋場所、二十九歳で入幕した。関脇で二場所連続11勝をあげ、大関を目前にしながら病気で休む後退、しかし、三十二年九州場所で金星連続を飾った。右四つ、左上手をとっての寄り身、投げ、やぐら投げを得意とする豪快な取り口で"熊本部"と異名をとり、親方（前審判部長）の当時も恐れられた。

二十六年初場所を最後に引退、片男波部屋を興し、横綱・玉の海（現役中に急死）を育てた。教場所を経て二所ノ関一門第五十代（現在は第五十一代）師匠。

◆雪ノ下会長（元横綱）「現役時代の片男波さんは"荒法師"といわれ、思い切った大ワザをしかけてくるので怖かった。私は11回もやられ、大の苦手だった。親方になって横綱玉の海を育てたのに先立たれたのは本当に気の毒だった。来年1月1日に還暦（65歳）を迎えたら悠々自適の生活ができるはずだったのに…。つつしんで哀悼の意を表します」

玉竜は苦悩の敗戦

■十片男波親方の訃報で、朝から部屋は重苦しいムードにつつまれた。そんな中で、部屋頭の一人関取の玉乃海ら、五人が土俵にあがった。前相撲と序ノ口の取組が押し出しに終わり、「気力の勝負だね」といいながらも「緊張の無理がうかなかった」と苦しい胸の内をあかした。最後に親方に会ったのはご自宅（15日）で「特別に変わったことはなかったのに…」と玉竜。ただ、玉乃海と三人が揃い、親方へ"はなむけ"の一番。

片男波親方安らかに

警尾　浩佑（相撲担当3年）

つい九日（六日）、東京・赤坂のホテルでの片男波・親方の「相撲道五十周年記念パーティー」では、あんなに元気だったのに…。まさか、悪い冗談だろうと、この原稿を書いていても信じられない親方の死だった。

昭和26年の夏場所のことだった。新十両の親方に取材した初めて相撲部屋になった場所で、初めてインタビューしたのが親方だった。「記者の新弟子か」とヒヤかされたことをいまでも覚えている。そんなわけで親方とは縁の付き合い、「ワシさん（記者の名）」「玉乃海さん」と呼び合った。

親方のロケは「オレはガダルカナル島と大阪で二度死んでいる。いまあるのは3ブロクたよ」だった。あとは大相撲にかける"男気"と"厳しさ"と弟子育成に全力をつくしていた。好き嫌いを抜きにして、親方とは縁の付き合い、「ワシさん（記者の名）」「玉乃海さん」と呼び合った。

昭和26年の夏場所のことだった。新十両の親方に取材した初めて相撲部屋になった場所で、初めてインタビューしたのが親方だった。「記者の新弟子か」とヒヤかされたことをいまでも覚えている。そんなわけで親方とは縁の付き合い、「ワシさん（記者の名）」「玉乃海さん」と呼び合った。

親方のロケは「オレはガダルカナル島と大阪で二度死んでいる。いまあるのは3ブロクたよ」だった。あとは大相撲にかける"男気"と"厳しさ"と弟子育成に全力をつくしていた。好き嫌いを抜きにして、親方とは縁の付き合い、「ワシさん（記者の名）」「玉乃海さん」と呼び合った。

昭和26年の夏場所のことだった。新十両の親方に取材した初めて相撲部屋になった場所で、初めてインタビューしたのが親方だった。「記者の新弟子か」とヒヤかされたことをいまでも覚えている。そんなわけで